

蝶を標本化するとき、端からこれは“裏展翅だな”と決めてかかる種類があり、本種はその典型例だといえる。すなわち翅表がほぼ黒褐色一色なのに対して、裏面は白地に大小の黒斑点がちりばめられ、尾状突起部のオレンジ紋もアクセントとなって圧倒的にこちらの方が見栄えがする。近縁のウスイロオナガシジミにも同じことがいえるが、こちらの翅表は後翅に大きめの美しい白紋というアクセントがあってまだ救いがある。八重山諸島に産するクロテンシロチョウも、白地に黒点もようだけときわめて単調なデザインの翅表に対して、ツマキチョウやクモマツマキチョウに似た、雲状の複雑な模様が微妙にひとを惹きつける。

さて、本種との出会いであるが、60年を越えるチョウ歴のなかで本種に関する記憶はほとんどなく、高知市という南国育ちの筆者にとっては確かに目にできる機会のすくなかった種ではあるが、その後に信州、北海道とチョウ目的の旅行を何度か繰り返し、最近ではオニグルミがあればチェックをするなど関心がないわけではなかったのに、出会いのチャンスをえられないままに推移したチョウだといえる。

そんなわけで、確実な出会い記録は以下の2005年8月となる。

2005年8月28日：しらびそ高原；自動車道沿い崖淵のガードレールに身を任せて上昇気流の涼しい風を楽しんでいる目に、下の方から比較的大型にみえるシジミチョウの仲間が認められる。遠目には時期的にゴマシジミかもしれないな、とその挙動に注意しているうちに、ちょうど上昇気流に乗ったかのように道路上まで舞い上がってくる。思わずネットインすると、それは筆者自身としては初のオナガシジミだ。その名の由来となっている長い尾状突起が片方だけ少し傷んで短くなっているメスで、翅表は産卵活動のあるていど済ませたと思われるスレ状態だが、それでも裏面のきれいな模様は残っている個体なので裏展翅標本用に確保する。昨日、木曾福島の国道19号沿いで休憩した際、オナガシジミが飛び出してくれないかとクルミの木をたたいてみたりしたのだが実際にこんな意外なところで出会えてうれしくなる。

なお、チョウとの出会い：ツマジロウラジャノメの項には引用していない観察事象として、ツマジロウラジャノメの母蝶が、本種が上昇気流に乗って飛んできた崖側の斜面岩陰に生えるヌカボと思われる食草に盛んに産卵活動をする様子をビデオカメラに撮影記録している。

